



2 分 53 秒 89

■ 久世 和資



400m ハードルの日本記録を持っている為末大さんと対談する機会があった。彼は、2001 年に、日本新記録 47 秒 89 をマークし、その記録は破られていない。興味深い話の一つが新しい練習法や技術の見切りのタイミングについてだ。選手は常に、新しい技術を試しながら練習するわけだが、もちろん結果はすぐに出ない。そこで悩むのが手法や技術に対して見切りをつけるタイミングである。このように根気強さと諦めのよさという相反する性質をバランスよく両立できるかが成長曲線を左右するらしい。為末さんの質問は、見切りのベストタイミングを高度なデータ分析や AI で求めることはできるか？であった。

これを解くには未来予測の必要もあり、現在の IT を駆使してもなかなか難しそうだ。ただ、スポーツには、IT がいろいろな形で使われている。たとえば平昌で開催された冬季オリンピックでは、日本選手の素晴らしい活躍があった。スピードスケートの女子団体パシュートも、2 分 53 秒 89 のオリンピック記録で金メダルとなった。このチームは、昨年 12 月にソルトレークで、2 分 50 秒 87 の世界新記録をマークしている。これらの素晴らしい結果は、もちろん、菊池彩花さん、高木菜那さん、高木美帆さん、佐藤綾乃さんの年間 300 日以上 of 過酷なトレーニングと努力によるところが大きい。彼女たちの才能と努力が大きな成功要因だが、IT も少なからず貢献している。チームの「一糸乱れぬ隊列」と「高速の先頭交代」は、風洞実験に加え、空気抵抗のシミュレーションなど IT が活躍した。

■ 久世 和資
IBM 執行役員 最高技術責任者

1987 年筑波大学工学研究科修了，IBM 入社。東京基礎研究所でプログラミング言語やソフトウェア工学のプロジェクトに従事。2004 年に東京基礎研究所所長。2009 年に研究開発担当。2017 年より現職。工学博士。



我々も、バスケットボール、テニス、ゴルフなど多くのスポーツに IT を活用している。リオのオリンピックでは、自転車競技チーム・パシュートの米国チームの銀メダル獲得に貢献した。選手のリアルタイム分析などを取り入れ、不可能とされた「11 カ月で 4.5% のチームパフォーマンスの向上」を達成することができた。スポーツへの IT 活用は、2020 年の東京オリンピックに向けて、今後、さらに加速するだろう。

IT を活用すべきところは、スポーツに限らず、たくさんある。日本は、ものづくりも強いし、サービスの質も高い。これは、何より、現場の仕事をする人の努力と工夫と熱意に加え、匠の技、すり合わせ、チームワーク、勘、経験則、物を大切にする気持ち、おもてなしの心などから達成されている。日本では、IT を使わないで素晴らしい結果や成果を出してきた結果、IT にはあまり頼らないという風土があるようにも思う。もちろん、人が主役であり、IT は道具にすぎない。AI も便利な道具の一つである。一人一人が、この道具を、電卓やハサミのように、当たり前のように、使いこなすことが大切ではないだろうか。また、IT の大切さや本質を正しく理解する必要もある。そうすることによって、日本の強みであるものづくりやサービスから新たなビジネス価値や社会価値を創造できるはずである。